

小木 喬著

散逸物語の研究

平安・鎌倉時代編

笠間書院刊

小木 喬 (おぎ たかし)

明治39年7月27日生。

昭和6年東大国文学科卒。

奈良師範学校・山口女子専門学校教授。

青森県立野辺地・弘前・青森高等学校長。

青森中央女子短大教授。

現在、青森県教育センター嘱託。

現住所、〒030 青森市八重田字露草71

文部省研究成果刊行助成図書 散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編

昭和四十八年二月二十八日発行

定価 九五〇〇円

著者 小木 喬

東京都江東区毛利一ノ七ノ五ノ八三

発行者 池田 猛雄

東京都江東区亀戸七ノ八二

印刷者 山岡 景信

東京都文京区音羽一ノ三ノ一九

製本者 手塚 貞造

発行所 有限 笠間書院

東京都千代田区神田神保町一ノ四六
電話 東京 (〇三) 二九四〇九六
振替口座 東京 五六〇〇二

3093-954007-0924

科学図書印刷・手塚製本所

序

小木喬博士の「散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編」の公刊は、私の生涯の夢の実現であり、この無上のよろこびをどう言いあらわしてよいか、ただとまどうばかりだ、というのが、今の私のいつわりのない実感である。私ごとをまっさきに述べたてようで恐縮であるが、私が昭和六年の大学の卒業論文の対象にえらんだ「浜松中納言物語」がたまたま残欠の物語であり、それと作者を同じくすると伝えられるために同時に副次的に研究対象とせざるを得なかった「夜の寝覚」がまた甚しい残欠の物語であつたのが機縁となつて、そのうち私は平安時代の物語の失なわれた部分の復原に勝手な想像をめぐらして、教師生活のこまぎれの暇の時間をたのしむという妙な道楽をはじめた。そのころたまたま同僚清水文雄教授が同人雑誌「文芸文化」を創刊して私にも何ページかの埋草を毎号書いてくれとすすめて下さつたのに甘えて——きびしい戦局が紙の配給を押え、したがって埋草を無用とするにいたるまで——四年の長きにわたつて四十あまりの散逸物語の復原試論みたいなものを載せていた。戦後に、それらに二三の別途発表の試論を加えて、おおけなくも一冊の本にしたのが、小木さんが、本書で時々引用して下さっている「平安時代物語の研究——散佚物語四十六篇の形態復原に関する試論」なのであるが、正直にいつて、「道楽」のつもりのうちはよかったが、それをあつかましくも「研究」の名にすりかえて改めて公にする段になると、主観的な推測のたしかさ、するどさがいのちのこの種の試論の、その「主観」的判断の凡庸さ、まずしさ、鈍さがいたいまでに自覺されて、反射

的に思い出されたのは小木さんのことであった。

一高以来の畏友小木喬さんの頭脳の俊敏無類のことは、彼の前著「鎌倉時代物語の研究」に「序」を強いられたときにも、こまごま書いたから省略するが、こうした推理の鋭さと確かさを絶対の必要条件とする仕事は、小木さんみたいな人でなければ、とてもだめだと、痛感されるにつけて、——今だから白状するが——私はもうあの「平安時代物語の研究」一冊で私の仕事は打ち切りにして、取りあげもろした残りのいくつかの平安の散逸物語と、鎌倉の散逸物語の一切は、小木さんをおおりにして、何がなんでもやってもらおう、ついでのこと、私の試論のあやまりや考え足らぬところのあれこれも——のちの研究者の方々のご迷惑を一日も早く除いてもらうためにも——訂正し補足してもらえたら、どんなにありがたいことか、とその後、たえず思いつづけていたのであった。

爾来十年にわたり、私のこの思いはつづるばかりであったが、君は自らの出身校である青森高等学校長をはじめとして県下の教育関係の仕事に打ちこみ、与えられたわずかの暇には酒を愛し釣を楽しむ、あらたな研究著述のためにまとまった時間を工面することなどはきわめてむずかしいようであった。願いは所詮叶えられそうもない、私はひそかにそうあきらめかけたときに、昭和三十九年の春、君のスキーでの危禍を聞いた。昔とった杵つかとばかりに自信満々、わざわざ聲梯まで遠征した老人の冷や水の見事なやりそこないであった。それからの一年の安静療養は、いやおうもなく君に暇を与え、君に身体への反省をうながし、酒を遠ざけ、肉体の浄化再生の機を恵んだ。けだし人間万事塞翁が馬である。病床で君は、戦前からの研究対象であった新葉和歌集についての稿を新たにすることで無聊を克服し、研究の世界への回帰の姿勢を完全に整え果されたようである。退院、校長の実務への復帰、定年、青森女子短大設立準備委員長、その職責の完了、といったようなことで、その後の数年

は、なお机に向う時間を持たなかったらしいが、昭和四十六年の春あたりに「いよいよおまえ（松尾）から押しつけられた散逸物語をかたづけよう」と言い入れてきたかと思うと、これこれの論文のコピーをとって送れ、かくかくの資料のどこそこをコピーしてくれと、二三度たよりがあっただけで、一年たつたかたぬかという去年の夏まえに、笠間書院にりんご箱一ぱいの原稿がとどいてきたと書院主の池田さんから電話があったので、私は耳を疑った。みかん箱の聞きちがえかと思ったからである。だが、真正正銘のりんご箱だという。それが本書九百数十ページを成す原稿だったのである。

既発表の論文若干をふくむとはいえ、一見羽化登仙しそうな白髪瘦躯六十有六歳の君のどこにこのたくましいエネルギーが蓄積されていたのかと驚嘆した。ことに君は、昔から手短かに書く主義で、常に私などの冗長不得要領の文章を憫笑していたのだから、この膨大な量産物を面前につきつけられて、私は君のヘンシンのみごとさに、全面降服せざるを得なかったが、考えて見れば、一高入学以来五十年、君は学校の授業こそろくに出なかったけれど、論文こそあんまりあくせく書かなかったけれど、不断の読書は質量ともに抜群であるやに仄聞していた、それらから吸収したあれやこれやが君の頭脳の中で自ら醗酵したものから、スキー禍以来、酒毒のみがきれいに洗い去られて純粋無垢の爆発的エネルギーとして今や一挙にほとばしり出たというわけなのであろう。果してしからば、このエネルギーの蓄積量はなお巨大であるはずである。今後なお十五年は健筆をふるって、近頃の若年寄りたちを奮い立たせていただきたい。これは単なる儀礼的言辞ではない、本心からの切なる願いである。

小木さんの俊敏なる頭脳に全面信頼している私として、本書の内容については、改めて何も申すべきことはない。もとよりこの種の研究の宿命として、当然、今後正され補なわれるべきことは、いろいろ出て来るであらう。だが、少なくとも今後五十年や百年いかなる研究者も本書を除外して散逸物

語を論ずることはできまいと考える。本書の出現によって、平安鎌倉期の物語文学史の空隙は、ほぼ完全に近く埋められ、書き改められるであろう。その功績の大いさのほどは、恐らく小木さん自身の想像しているものを、はるかに絶するにちがいない。

私のよろこびもまたここにきわまるのである。

昭和四十八年一月三日

松 尾 聡

は し が き

前著「鎌倉時代物語の研究」を出したのは、わたしがまだ青森県立弘前高等学校長であった昭和三十六年のことで、それからもう既に十一年になる。昭和三十八年には、母校である青森高等学校に赴任し、ここで四年間校長としての最後のご奉公をして、昭和四十二年三月定年退職した。その間、三十九年の二月にはスキーで左の大腿骨折をして、約一年療養したり、青森県高等学校体育連盟会長に引っぱり出されて、全国高校体育大会を青森で開催するのに、跛の身体で走り回ったり、いろいろの事があった。

せっかく前著を書くことによって、研究の世界に立ち返ろうとしていたのに、周囲の事情は、なかなかわたしの希望通りにはいかなかったのである。しかし、昭和四十年十一月・十二月号「国語と国文学」誌に発表した「新葉和歌集初撰本と流布本の原形」は、骨折のため、胸から爪先までを固いギブスに包まれて、仰むきになったまま横にも向けない状態で、薄暗い県立中央病院のベッドで書いたものである。今読み返してみると、ずいぶん固い文章で、自分ながら厭になるが、生命に別条は無いとは言え、外の自然を見ることもできない、ベッドに拘束された身体では、仕方が無かったのだなと、そういう思出になる論文である。だが、ベッドから解放されても、いろいろの事が次から次へと湧いてきて、研究の時間は容易に見付けることができなかった。

全国高等学校総合体育大会青森大会が行なわれたのは、四十一年の夏で、それが終わった時、わたし

は二年越しの責任から解き放されて、ようやくほっとした。そして、その翌年の三月には、いよいよ定年退職して、あらゆる公務そして雑務から自由になれるのだ、それでは何をしようかな、と考えた。国文学の世界には、無数の問題があり、テーマがある。しかし、わたしにできる仕事といえば、それはもう限られた範囲の、中世の物語を中心としたわずかの世界に限られてしまうのである。いくら人間の可能性については限界が無いとは言っても、限られた余命と能力を考えると、わたしのこれからの仕事は、自然に落ち付く所に決らなければならなかったのである。

四十一年の、それはいつのことであつたかは忘れたが、ある上京のときに、わたしは、散逸物語を少しまとめてみたいという話を、松尾聰さんに話をした。同氏は、旧制一高時代以来のわたしの先達であり、援護者であり、同時の口の悪い監督でもあつたし、また「平安時代物語の研究」で、散逸物語の開拓の先駆者でもあつたのである。松尾さんは、わたしの話を聞いて、非常に喜んでくれた。同氏は、「全釈源氏物語」(筑摩書房)を畢世の事業として、全力を投入しながら、その仕事の遅々として涉らぬことに頭を痛めている時でもあり、散逸物語で自分の仕残した仕事に、やはりなみなみならぬ未練を持っていたに違いないが、もはや諦めの境地にあつたためであろうと思う。そして同氏は、昭和四十二年笠間書院刊「平安時代物語論考」の「あとがき」に、はっきりその事を述べてさえおられる。

さて、それでは、わたしの方はというと、四十二年三月無事に退職になったのはいいが、そのあとが、またあまりに無事に過ぎる日々であつた。はじめのうちこそ、そういう退職者がみんな経験するように、朝は勤務時代と同じころ目が覚める。しかし、ああ、なにも今起きなければならぬこともないんだな、誰も自分を待っていてくれる人も、生徒もいないんだな、ということを考えて、起きる

気もしなくなってくる。このごろテレビでやっている「ゲゲゲの鬼太郎」という劇のテーマソングに「朝は寝床で、グーグーグー、楽しいな、楽しいな、おバケにゃ学校も、試験もなんにもない」という歌がはいるが、こちらが、そのおバケと同様に、なんにもしなけりゃならぬ仕事が無い身になってしまったら、いや、これほど味気ない日々は無いと、つくづく思い知ったことであった。しかし、今更辞めた学校に、ヌッと顔を出したら、それこそおバケになってしまいうし、これで仕方が無いんだと、自分に言い聞かせ言い聞かせているうちに、いつの間にやらその状態に馴れて、その上、もともとずばらな生れつきときているから、すっかりそのおらぶらが板についてしまったのである。こうして、夢のように、いつか二年の歳月が流れ去った。

昭和四十四年の五月ころであったが、ふっと青森中央女子短大設立の話が出てきて、いつの間にやらわたしがその設立準備委員長をやらされるはめになり、何と言うことはない、ちょうど馬車馬のうちに、ただ明け暮れを、ゴタゴタ仕事に忙殺される身になってしまったのである。幸にして、短大は文部省の認可を得て開校とはなったのだが、何しろ帳簿一つないところから、あらゆる授業に必要な一切の準備をすることは、なかなか容易なことではない。あれもこれもと、毎日毎日必要に駆り立てられて動くしかなかった、それが当時のわたしの状態であった。だから、ふり返ってみると、昭和四十二年と四十四年には、ほとんど仕事らしい仕事はしていない。そして学校がどうやら動き出した昭和四十五年の後半から、わたしのピッチも上ってきたようである。

昨四十六年の十月、久し振りでわたしは学習院の松尾さんのところを訪問した。というのは、昭和四十三年に、あまりぶらぶらしているのも何だからということで、青森市内の同好者を募って、「源氏物語を読む会」というのを作って、桐壺からだんだんと読んできていたのだが、その方達が京都を見

たいというので、十人ばかりの有志と、ちょうど修学旅行の復習というようなことで、桂や修学院離宮を拝観しての帰り途であった。その時に、笠間書院主池田猛雄氏とも、折よくお会いできて、わたしの本の出版の打合せができあがったのである。

わたしの最初の計画では、風葉和歌集所載の二百ばかりの作品についての論考をまとめてみるつもりでいた。しかし、考えてみると、平安時代以降の諸書に見えている散逸物語で、風葉集に載っていないものは、数からいってもそう多くはないし、ついでにそれも入れて、平安・鎌倉の両時代にわたって、すべての散逸物語を網羅する方が、利用者にとっても便利であろうと思われるので、そういう風に計画を変更することにし、松尾・池田両氏の賛成も得た。しかし、このことは、じつは後になって、わたしに大きな負担となった。というのは、風葉集に見えている散逸物語については、従来松尾氏以外の論考はほとんど無い。したがって、松尾氏の論文四十ばかりを読み返すほかは、それぞれの資料について、自分自身で思うがままに考究していけば、それでいいのである。ところが、平安時代の散逸物語については、既に先学の論究の加えられたものが多いので、そういう論文をまず読まなければ、どうにも論の進めようが無い。しかし、青森市のような商業都市では、学術的な図書館は無いので、そういう既発表の図書論文を見ることに大いに苦労した。そして、この点でも松尾氏からなみなみならぬ援助をいただいた。しかし、それでもなお多くの論文や著書を見残し、あるいは見落していることであろうと思う。この点、先学諸氏に対して、深く御詫び申し上げたいと思うのである。

由来、散逸物語の研究については、「平安時代散佚物語の研究序説」(平安時代物語論考「所収」)で、松尾聰氏が述べていられるように、対象としてのその物語の資料その他においても、また研究者の資質においても、幾多の困難が存在する。例えば、前者において、「逢坂越えぬ権中納言」物語は、「六条

斎院歌合にも、「風葉和歌集」にも、同じ「君が代の長きためしにあやめ草千ひろにあまるねをぞ引つる」の歌一首しか現われていない。この資料によってわかることは、物語中に「根合」の場面があったということだけである。そして、題名によって、権中納言という貴公子が主人公で、それが恋いする人と契り得なかったというのが内容であるということを推察せしめるに止まる。しかし、この作品の場合は、その推察が、現存のその物語の内容と、あまり離れていないと言い得る。けれども、「花さくら折る」物語のような場合、誰が風葉集の一首と題名から、ドンデン返しの本物語の内容を推察し得ようか。そういう点で、筆者は、風葉集に一、二首しか資料の無い作品については、臆病なほど臆測をさし控えた。したがって、それは論考と言えるようなものではないことは、重々承知しているけれど、これも将来資料の現われるにしたがって改善されるより仕方がないものと諦めているのである。

次に、研究者の資質であるが、この著作をものするに当って、わたしは、つくづくと自分の文字通りの浅学菲才を痛感した。ことに、和歌の方面において、自己の不勉強を思い知らされた。題名や歌において、必ず何かの引歌があるはずだと感じながら、その原歌を見出せなかったものが多々ある。また歴史の方面についても同様の苦悩を味わうことが多かったのである。したがって、この著作は、自分だけの主観に流された、夢語りとも言うべきものであるかもしれないと思うのである。だが、研究者がただ一人の場合、その人間の主観がはいることは、これは止むを得ないことである。これを避けるためには複数の研究者によるグループ研究が望ましい。そして、その構成員が、歴史・物語・和歌・国語・風俗等のそれぞれの専門家であるなら申し分はない。いつの日にか、そういうグループができて、わたしのこの著書を叩き台にして、完全な定説をものして貰いたいと願うものである。

いまこの拙著の成り立ちをふり返ってみるに、最も大きな学恩をいただいたのは「校本風葉和歌集」の著者中野莊次氏である。このすばらしい研究があったからこそ、風葉集の資料を安心して駆使できたのであって、もしこの本が無かったならば、おそらく拙著も生れなかったことであろう。昭和の初めに、これほどの業績をものされた同氏が、その後家業を継ぐために研究から遠ざけられたと聞いたが、学界にとっては、まことに大きな損失というべきで、いうならば千載の恨事であると、わたしには思われてならない。わたしが昭和十八年から二十一年まで、奈良師範学校に在職中に、一度どこかで同氏に御目にかかったような気がするのだが、今はもう二十数年の昔のこと、それが果して実際であったかどうか、茫々として夢の如しである。しかし、今こうして机に対して思いにふけるとき、見えざる縁の糸が、同氏との間につながっていることを、しみじみと感ぜざるを得ないのである。ここに記して、深く同氏に感謝の念を捧げたいと思う。

畏友松尾聰氏の恩恵については、今更述べることもない。また、この面倒で、そして一向に儲けにもなりそうもない著述の出版を、心よく引き受けて下さった笠間書院主池田猛雄氏にも深甚なる謝意を表したい。そして、その売れそうにもない本であることを認めて、出版助成金を賜わることになった文部省当局に対しても、厚く感謝申し上げる次第である。なお、編集に当って献身的に援助してくれた妻と三男の明、あるいは校正・索引を担当していただいた斎藤清吉・菊池ゆき子の諸氏にも厚く御礼申し上げたいと思う。

昭和四十七年十二月

散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編
目 次

序 松尾 聰

はしがき

第一章 総 説

第一節 物語史概説

一 「物語」という語の意義 三

二 源氏物語以前 五

三 源氏物語以後無名草子以前 八

四 無名草子以後風葉集以前 一〇

五 風葉集以後 一九

第二節 資料解説

一 三 宝 絵 二三

二 勸女往生義 二四

第二章 各 説

凡 例

あ

1 秋の夜長しとわぶる……	七
2 秋の夜ながむる……	三
3 朱の盤……	三
4 あさうづ……	四
5 朝倉……	五
6 あさくら山……	五
7 浅茅が原の尚侍(内侍督)……	五
8 朝露……	二七
9 あ	
しすだれ……	二〇
10 あしたつ……	二三
11 あしのやへぶき……	二四
12 あし火たく屋……	二〇
13 あじろ(網代)……	三〇
14 あだ波……	三三
15 あたりきらぬ……	二四
16 あづま……	三〇
17 あと	
う……	三六
18 あひずみ苦しき……	三三
19 扇流し……	四三
20 逢坂……	四九
21 逢ふにかふる……	二五

三 源氏物語

四 枕草子

五 六条斎院物語合

六 狭衣物語

七 源氏一品経

八 和歌色葉

九 無名草子

十 拾遺百番歌合

十一 風葉和歌集

六

七

二四

二六

二七

三三

三六

三六

三六

三〇

三三

22 あま(海士子・あま入)……二六	23 海人の刈藻……二六	24 天の羽衣……三六	25 海人の藻塩火……三六
26 あまやどり……二七	27 あやめうらやむ中納言……二九	28 あやめかたひく権少将……三〇	
29 あやめもしらぬ大将……三二	30 あらば逢ふよのと嘆く民部卿……三三	31 有馬の王子……三三	
32 あれまぐ……三四			
い			
33 伊賀のたをめ……三六	34 石山……三七	35 いせを……三八	36 いちぬひろひ……三三
37 一品宮			
38 岩つつ波……三四	39 岩垣沼……三八	40 いなふち……四一	41 いはぬに人の……四一
42 岩屋……四三	43 いまめきの中将……四九		
う			
44 うきなみ……三五	45 うたたね……三五	46 宇治の河浪……六一	47 宇治の橋姫……六三
48 うつ			
すみなはの大将……三八	49 うつせみしらぬ……三八	50 梅壺の少将……三八	51 梅めづる……三九
52 うもれ木……三九	53 うら風にまがふ琴のこゑ……三九	54 うらみしらぬ……三九	
お			
55 老人のかたみ……三九	56 音聞き……四〇	57 落しぶみ……四〇	58 おのれけおたき……四一
59 おほつの王子……三九	60 おほる……三九	61 おもかげこふる……三九	62 おやこの中……四〇
か			
63 かいばみ……三三	64 隠れ蓑……三七	65 重ぬる夢……三九	66 霞へだつる中務宮……三〇
67 交			
野……三四	68 交野の少将……三九	69 桂……三七	70 桂の中納言……三九
71 川霧……四六	72 か		
ばねたづぬる……三五	73 かはほり……三五	74 貝……三八	75 顔よき舞姫……三八
76 かも……三〇	77 かやが下折れ……三〇	78 唐国……三八	79 からもり……三九

く	80 孔雀の御子…三六	81 国譲り…三七〇	82 雲るの月…三七〇	三六九
け	83 けぶりにむせぶ…三七五	84 烟のしるべ…三七六		三七五
こ	85 紅梅…三七六	86 心高き春宮宣旨…三七九	87 心やり…三七五	三七八
	らの烟…三六六	90 恋に身かふる…三七七	91 こまの…三六六	
さ	94 嵯峨野…四〇二	95 ささわけしあさ…四〇三	96 五月…四〇七	四〇一
			97 里のしるべ…四〇八	
し	98 四季…四二	99 式部卿宮…四七	100 しぐれ…四八	四二
	巻…四三	103 忍び音…四四	104 しのぶ…四八	
	107 清水にぬるる…四六	108 正三位…四七	109 しらら…四七	
す	110 すずめ…四七五	111 硯割り…四八	112 すまひ…四七	四七五
せ	114 芹川…五〇六	115 芹摘みし…五二	116 せれう…五三	五〇六
そ	117 袖ぬらす…五二四			五二四
た				五二